事務員と寺務員

企業で働く事務職の人のことを事務員と言います。寺院で働く人のことを寺務員と言います。私は先日　当院人事部の僧侶で元銀行員　会社員の人からお寺で働くにはそれに相応しい人格の人がよいので基準をつくって欲しいという要望がありました。その人事の人は私は寺の息子として育ったし定年退職後に僧侶になった端くれとして寺族出身として言えると思うのはまだまだこれでもお寺は聖域であると。人々の拠り所であるべき。田舎の貧乏寺に生まれても両親は苦労して子ども３人を大学まで出してくれました。地域ではたいへん信頼の厚い人格者だったと思います。と。常に人の模範となり世のため人のために働いてくれていたと記憶しています。それはやはりどこかに滅私奉公という崇高な姿勢が常にあったからだと思います。とのことでした。

そこで私は改めてお寺とは何かということを考えてみました。お寺はどうあるべきなのかと。僧侶はどんな心構えで生きていくべきなのか。そこで聖職者を支える寺務員とはどんな人が相応しいのかと。採用の基準はどこにあるのか。それは理想論かもしれませんが私は目先の損得では動かない人。誘惑に負けない人。一時の利益や快楽のためにうつつを抜かすのではなく人間的成長のために生きられる人がお寺にはよいと思います。自分がたとえ犠牲になっても人を助けたいという人。自分の幸せより人の幸せを優先できる人。人を幸せにすることが自分の幸せであると思える人です。人の幸せを素直に祈ってあげられる人です。大谷翔平選手は自らの歩くところを常にキレイに必ずゴミ拾いをしながら歩行するそうですが後から来る人のために自らの仕事は利他です。それが本当の紳士淑女かもしれません。修行とは自らを律することではありますがその心は利他心であります。そして無私かと思います。最近　私が知った松下幸之助の名言に「理由はともあれそれでもそれでもすべての責任は自分にある、私が悪かったと言える人こそ本物である。」と。これには私は痺れました。これぞ究極の人格者であるかと。私たちが目指すべきところはそこにある

と思います。何の言い訳もしない。潔く非を認めたり自ら罪責を背負う人、被る人、これが聖職者でありそれに仕え奉仕する人が寺務員であるというのが私の考えです。それが基準です。採用の条件です。私ごとで恐縮ですが私がこの15年住職を拝命して爾来　仏教改革に挑んできましたがよかったことは仕事が好きで楽しかったからここまで来れたんだと思います。その根底には常に利他人を幸せにしたい、楽にしてあげたい、少しでも負担をかけたくないという志があったと思います。利益を追いかけるようなことは決してしなかったと思います。だからこそ頑張れたし天は味方をしてくれたんだと思います。どんな誹謗中傷にも耐えられたし批判にもめげずにやり抜いて来れたんだと思います。何かにつけて言われているのはわかっていても情熱と勇気と信念でもってそれよりも速く駆け抜けてきたと思います。まるでラガーマンのような人生だったと振り返ることがあります。それは若い時に修行に明け暮れたり留学をして猛勉強したり下積みの仕事　人が嫌がる仕事を率先してやってきたからこそ今があると自負しています。同業者からはよく嫌味ばかり言われていつも不愉快な思いばかりをしてきた記憶しかありません。よく耐えてきたと自分でも思います。信念だけは堅かったんだと思います。私は心付けをいただいた時でも決して中身は見ません。それは尊い浄財であって神聖なものです。多寡ではありません。ありがとうございますと言って手を合わせるだけです。お気持ちはお気持ちとしていただき嫌らしく中身は見ないことにしています。そしてそのまま経理に渡してつけておいてください。その方の実績にはなるようにして、と。それだけです。それは私がいただいているのではなく私がお寺にいて毎日毎日お勤めをしてご本尊がいてくれているからいただけるものであって私のものではないからです。浄財とはご本尊がいただきそれを私たち神仏に仕えるものが大切に使わせていただきお寺のため世のため人のために。そして私生活においては生きた浄財として還元できるような使途であるべきです。それが巡り巡ってその功徳が御利益が施主に巡っていくようにすべきです。そのことをご回向と言います。今のお寺が僧侶が財政難であるのはそうして来なかったからに過

ぎません。自業自得です。この世のすべてのことは天の配剤です。天の制御であり計らいです。だから正直だし人は正直であるべきなんだと思います。誠実に生きていれば誠実に応えてくれるのが天というものです。すべては本人次第天次第です。鏡です。人生は自分を写す鏡です。これから新しい人との出会いの季節です。最近は草創期の頃のことを思い出します。あの頃は毎日毎日が残業でした。夜の10時までは頻繁にありました。あの当時の人の中にはHP作製から接客　事務処理　掃除　重労働　子供のおむつ変え　食事づくりと何でもやってくれる人がいました。時には子どもをおぶって除草剤を撒いていました。あの過酷な労働環境にして薄給に甘んじてくれていた人たちがいました。草創期の5年は一日中休みなく働いていた時期だったと思います。それがあったためにその後にメディア出演　寺院革命等に繋がったんだと思います。今寺院大不況の中でも私たちが非常に恵まれた日常生活を送れているのはあの草創期の人たちが本当に頑張ってくれたおかげだったと思います。円熟期　収穫期にあるのは先人のやはりおかげです。今　私たちはその上に乗っかっているのでもっと謙虚でいないといけないと思う今日この頃です。あの草創期には財政難で給料日に給料をもらえないことは頻繁でした。カツカツで先行投資に明け暮れたりしてギリギリの中での生活でした。子どもが幼少期であったために実は助かりました。今にして思えば最初からずっと挑戦し続けていたと思います。走り続けてきたと思います。修行の連続だったと思います。このまま最後まで走り続けていければそれに越したことはありません。これからは次代を担う人材を育て夢のある仕事をさらに創出していきたいと思います。それには基準は必要です。年度末に来て採用の判断を旗幟鮮明にさせていただきました。みなさんのご意見にも耳を傾けていきたいと思います。来年度も何卒宜しくお願い申し上げます。

合掌

令和5年3月28日

見性院住職

寺務職員（僧侶を含む）とは何か

一、神仏及び聖職者に仕える人

一、素直に人の幸せを祈れる人

一、生きた浄財を世の中に還元できる人

一、生きた浄財を自己研鑽のために使える人

一、目先の損得では動かない人

一、常に人間的成長を優先できる人

一、自己犠牲と滅私奉公の人

一、品位と品格のある人

一、働くことが好きな人

一、正直で誠実な人